

[成果情報名] 培養土を用いたチャの根域制限密閉挿し方法

[要約]ピートモスとバーミキュライトを混合して園芸用深型育苗バットに入れ、8月中旬以降9月中旬までに密閉挿しを行い、この苗を翌年定植すると定植当年の冬には40cm以上に伸長した樹を得ることができる。

[キーワード] 挿し木、バーミキュライト、ピートモス、深型育苗バット

[担当] 大和茶研究センター

[分類] 普及・行政・教育の参考となる技術情報

[背景・目的]

茶生産者が必要な品種を得る場合、苗生産者からの購入が基本となるが、近年、人気のある品種が品薄で入手困難になったり、希少な品種など必要な苗が手に入らない恐れがあることから、挿し木による自家増殖を行う必要が生じている。一般に行われている普通挿しの時期は6月であり、この時期は茶生産者が通常の管理作業と茶の製造で多忙のため、これら作業と挿し木を同時に進めることは困難である。

そこで、茶生産者の繁忙期を避けた秋挿しによる苗木の自家増殖方法について、発根および新梢伸長の改善を目的に培養土使用による根域制限密閉挿しによる生産方法について検討する。

[成果の内容・特徴]

1. 8月中旬～9月中旬に「やぶきた」から採取した挿し穂を使用し、3葉3節に調製する。
挿し木間隔4cm、条間11cmの密度で、挿し木床の培養土として、ピートモス：バーミキュライトを1:1(容積比)で混合充填した深さ10cmの底がメッシュ状になった市販の園芸用深型育苗バットに挿し木を行う。
2. 挿し木後のバットは、十分に水を含ませた床土上に静置し、P0フィルム等で密閉、その上部を支柱で10cm程度の隙間が空くように囲い、寒冷紗(遮光率75%程度)で被覆する(図1)。冬季は寒冷紗の上部に20cm程度の隙間を空け採光する。
3. この方法で生産した苗は定植前3月の時点では91.7%以上生存し(データ略)、早い時期に挿し木を実施した方が根長が長い傾向がある(図2)。
4. 上記苗を圃場に定植すると、翌年の冬季には樹高が平均40cm以上になる(図3)。

[成果の活用面・留意点]

1. この成果は2023年8月16日～9月15日に大和茶研究センター(標高430m)で挿し木した「やぶきた」苗の試験結果に基づいている。挿し木する品種によっては、挿し木時期により発根が劣る可能性がある。
2. 挿し木用の培養土は使用時に十分に水を含ませた状態で使用する。
3. 挿し穂を確保する場合、一番茶摘採後にやや深めに刈込むことで、旺盛な穂の発生を促す。
4. 育苗中は、病害虫等の被害により枯死や生育不良が発生することがあるため、穂の採取前もしくは挿し木時に防除を徹底する必要がある。
5. 登録品種を用いて自家増殖する場合は、種苗法により育成者権者の許諾を受ける必要がある。
6. 床土は使用前にフィルムなどで覆い太陽熱処理などを実施することが望ましい。

[具体的データ]



図 1 密閉挿しの様子

右上: フィルム上部から支柱で 10cm 程度の隙間が空くように囲い、寒冷紗（遮光率 75%）で被覆
右下:P0 フィルム内の挿し木状態
挿し木時（直後）

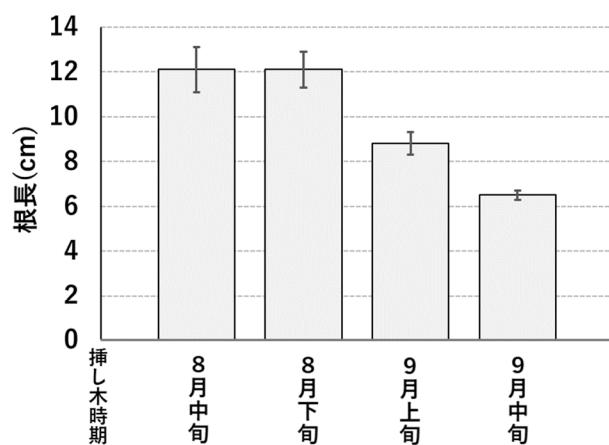


図 2 挿し木時期の違いが培養土挿し苗の根長に及ぼす影響（2024年3月調査）

^z 誤差範囲は標準誤差を示す、各区 12 株 3 反復供試

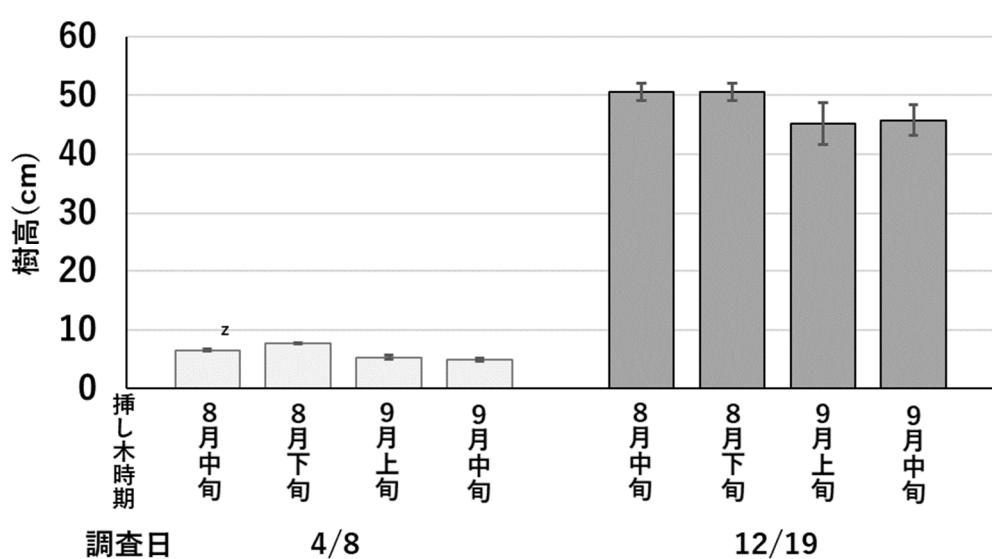


図 3 挿し木時期の違いが培養土挿し苗の定植後の樹高に及ぼす影響

^z 誤差範囲は標準誤差を示す
各区 10 株 3 反復供試、本圃 4 月 1 日定植、N 10 kg/10 a 施肥

[その他]

研究課題名：チャの秋挿しによる短期自家育苗方法の確立

予算区分・研究期間：県単・2022～2024年度

研究担当者：脇坂 勝

発表誌等：2024 年度日本茶業学会研究発表会：茶業研究報告第 138 号（別冊）：15

2024 年度奈良県農業研究開発センター成果発表会（口頭発表）